

# 飼育しポート

## ホオアカトキの繁殖 飼育展示担当 松井 健



【左側 巣立ち前のヒナ】

大森山動物園のホオアカトキは、2005年4月に東京都恩賜上野動物園からオス3羽メス3羽を寄贈していただいた個体である。来園してトキ舎に收容した直後から落ち着いた様子で、2005年4月23日に巣箱(48×47×66cm)を設置するとすぐに営巣を始め、25日には産卵・抱卵した。5月21日にふ化を確認、親と同じ黒い羽も生えそろう順調に育っているものと思った矢先、巣立つ直前の7月7日に巣から落ちて死亡した。なぜ落ちたのか原因は不明であった。

今年は冬の間から、数十センチに切った竹枝などの巣材を十分展示場に入れて繁殖期に備えた。すると2月中旬頃から巣箱に巣材を運ぶようになり、去年より1ヶ月以上も早い3月6日には産卵がみられた。その後は雌雄交代で約1ヶ月間一生懸命抱卵し、4月3日に巢の下に卵の殻を発見、ヒナがふ化したことを確認した。去年ヒナが途中で死んでしまった原因が分からないまま、餌の量を増やしたり(スズメとネズミがトキの餌を食べるため)、普段の時期は与えていないオキアミやドジョウを追加し

たり工夫しながらヒナの成長を見守ったところ、今年は5月29日に無事に巣立ちを迎えることが出来た。去年何が悪くて、今年何が良かったのか、担当者としていまだにわからない事ばかりだが、営巣時期の変化や餌の改善が繁殖の成功に結びついているものと考えている。これからも大いに勉強して、ホオアカトキと同居展示している、ブロンズトキやショウジョウトキの繁殖を目指して頑張りたい。

## アシカの離乳成功例 飼育展示担当 柴田 典弘



昨年の6月4日に生まれたカリフォルニアアシカのナナミ(メス)。生後半を過ぎた頃から、自力採食によって離乳させようと試行錯誤を繰り返してきた。当園で与えている餌は解凍のアジとホッケの2種類。ナナミの両親の嗜好性から、「アジでは難しいが、ホッケならば可能性はあるだろう」と密かに期待していた。もちろん、ただプールにそのまま投げ入れたり、顔の前に持っていくだけでは厳しいだろうと考え、すり身にしてみたり、様々な大きさに切ってみたり、凍らせてみたり。さらには、あたかも魚が水中を動いているかのようにヒモをつけて引っ張り回したり、ヤリイカやホタルイカを与えてみたりと、ナナミが少しでも関心を示す対象を見つけると毎日の餌やりの中で即実践していた。

そんな中、生後約10ヶ月齢を迎えた4月上旬、ようやくホッケを噛み砕くような行動が見られるようになり期待は一気に膨らんだが、残念ながら餌は水中に吐き出されていた。

自力採食による離乳訓練のリミットは1年間。母のお乳がまだ出ているのか心配なこの時期、エサを食べることができなければ、やはり強制的に飲み込ませることも考えざるを得ない。「できることなら自然に離乳して欲しい」と強く願ってきた自らの思いと現実との狭間で葛藤する日々が続いた。

間もなく生後1年の「リミット」を迎えようとしていた5月30日のこと、水際に明らかにナナミのものと思われる小さな糞を発見。母乳だけの糞と違い、魚を食べたことが分かるしっかりとしたものであった。その日以降、ホッケを激しく横に振り、ちぎれた身を飲みこむ行動が見られるようになっただけでなく、手に持っているホッケを直接引きちぎりながら食べるようになった。そして生後1年をわずかに過ぎた6月16日、遂にホッケを「頭から」丸飲みする姿が確認できた。

自力採食による離乳が成功した最大の要因としては、やはりホッケに対する嗜好性の高さが挙げられるが、餌をくわえさせるために実施してきた様々な努力も欠かせないものだったと感じている。